

スパルタのテゲア征服について

新村 祐一郎

I

古代のスパルタの歴史のうち、もっとも不明な点の多い時期は、紀元前7世紀初頭から同6世紀の前半に至る期間である。前8世紀後半に、メッセニア（Messenia）の征服が行なわれたことは疑われていないが、その後550 B. C. 頃のテゲア（Tegea）征服までの間に、主要な事件として、メッセニアの再征服（第二次メッセニア戦争）が行なわれたこと、諸種の内政改革が実施されたりしきこと、テゲア攻略を試みながら失敗をくり返していたことなどが伝えられるのみである。このうち、第二次メッセニア戦争はテュルタイオス（Tyrtaios）の詩の断片（fr. 5）によって明らかではあるが、その時期はいまだに確定され得ないのである。しかし、筆者がここで重要視したいのは、前6世紀の半ばに至って、ようやく達成されたテゲア征服である。この事件は、ただ単に、スパルタのテゲアに対する軍事的な優位を意味するのみではない、と思われるからである。本稿では、550 B. C. 以前の状況を考古学的史料と乏しい文献とによって、できうる限り再現せしめつつ、このテゲア攻略とその成功の意義を明らかにせんとするものである。

前7世紀はギリシア史上において、きわめて重大な時期であった。すなわち、各地に立法者があらわれ、立法事業が行なわれるのである。この事業は、いうまでもなく、既存の慣習を法制化するものが多いが、同時に立法は民衆に対する特権階級の政治的譲歩を伴なう。民会の権限が確定されるのもこの時期である。スパルタの場合、いわゆる「大レトラ」(Rhetra)の制定が、前8世紀の前半から中葉にかけてであることは、すでに報告したが、ここで注意しなければならないのは、これに追加条項がつけ加えられたことである。「大レトラ」の本文の解釈も報告済であるので、再説しないが、その第一の眼目は新部族制度の制定——スパルティアタイ住地の再編成——であり、第二の眼目は長老会（Gerusia）と民会（Apella）との法制化である。問題の追加条項は、主として、第二の眼目に関連するものであるが、本稿では紙数の関係で、この問題に関する部分を割愛せざるを得ない。そこで、以下にその要点のみを記す。

民会の法制化によって、民衆勢力の強化されることをおそれるアルカゲタイ（王）と長老たちは長老会を整備して、民会に提案すべき議案の予備的審議をする（προβουλέειν）機関と定めることによってこれに対処し、しかも民会には裁決権のみを与えた。しかるに、民衆は「大レトラ」で認められていないと考えられる議案の審議権、反対提案権を所有するが如き行動をとったために、長老会はそれを規制することを欲した。それが追加条項の成立によって、実現したのである。これは「大レトラ」本文の規定の再確認であり、これによって、王と長老との妥協による貴族制が確固たるものとなったのである。その時期は、ほぼ700 B. C. 頃と推定される。

II

さきに述べた如く、前7世紀はギリシア各地に立法者が出現し、立法事業の行なわれた時代であるが、同時にまた、この世紀（特に前半）には、武具と戦術の面でも、大きな変化があった、としばしば指摘されている。すなわち、それ以前の武具としては、首から下全身を被り革製の楯と青銅の穂先のある槍がおもなものであったが、前8世紀以来、直径約1メートルの青銅製の楯が採用されはじめた。この楯と槍と胸甲とで武装したのが、いわゆる重装兵である。そして、それまでの主として貴族を中心とした個人対個人の決戦が、かなり、重要性をもち、したがって、しばしばその存在が軽視されていた軽装兵の集団が、新しい武具の導入によって、次第に重装兵へと転換し、軍隊組織の中で、飛躍的に重要性を増し、個人的な卓越の意義は、次第に失われてゆく。重装兵ファランクス（phalanx）が全ギリシアに普及されたのは、600 B. C. より以前とされ、また、約1世紀間のうちに、広く行き渡ったものと思われる。Lorimer は重装兵ファランクスを暗示するこの楯（把手つきの円楯、porpax shield）の採用は、コリントスとアテナイがもっとも早く、前7世紀の最初期、スパルタでは700-675 B. C. で、ボイオティアそのほかでも、スパルタとほぼ同時代からであることを文献史料、考古学的史料の両面から立証している。一国が新しい武具と戦術を採用した場合、他国も、対抗上、同じような武具・戦術を取り入れるはずである。したがって、ギリシアの大部分の国家で、前7世紀前半には、新しい武具と戦術がとり入れられはじめた、と思われる。しかし、この重装兵ファランクスは、その性格上、多くの人員を要する。先述の如く、かつて貴族の個人的武勇のかげにかくれて重要視されなかった市民たちが、重装兵として登場してくる。この結果、市民はみずからが国家の守護者たるの自信と自覚を持ち、ひいては、政治上の発言権を要求するようになるのである。同時に、このことが、前7世紀に多くの立法者が出現して、民衆への政治的譲歩を行なった背景であることは、いうまでもなからう。

さて、以上のような戦術上の変化が起りつつあった前7世紀に、スパルタは10年以上にわたって行なわれた第二次メッセニア戦争のほかにも、あるいはアルゴスと対戦し、あるいはアルカディアと対戦している。このうち、アルゴスに侵入して Hysiai 付近で敗北を喫したのは 669/8 B. C. である（Pausanias II. 24.7）が、この当時、アルゴスはフェイドンの配下にあった、と考えられる。Hysiai の敗戦の1年後に、フェイドンはペロポネソス半島を横断して、エリスからオリュンピアを奪い、自身の主宰のもとに、祭典を催している（Herodotos VI. 127）。かくしてフェイドンはペロポネソスの大部分を自己の圧力下においたのである。このフェイドンの軍隊が新しい戦術を用いていたか否かは明らかでないが、Andrewes はフェイドン治下のアルゴス軍が、おそらく、新スタイルの軍隊の効果を発揮した最初の例であろう、と考えている。もっとも、このアルゴス軍に敗れたスパルタ軍の構成も不明であるが、すでに、形の上では、新スタイルをとっていたと思われる。

以上の Hysiai の敗戦よりも大きな意味を持っていたのが第二次メッセニア戦争である。この戦争はテュルタイオスの時代であるが、はっきりした年代は明らかでない。パウサニアス（IV. 15.1）によると、戦争の開始は23オリンピアードの第4年（685 B. C.）となっているが、この年代を、そのまま、認めている論者は少ない。この戦争の年代については、前7世紀前半とする Chrimes から 610-582 B. C. というおそい年代を与えている

Lenschau⁽⁶⁾に至るまでの間に、さまざまな見解があるが⁽⁷⁾、前7世紀中葉から末にかけてとするのが大部分で、また、Hysiaiの敗戦以前とはっきり言明しているものはない。Dickins, Hammond, HuxleyなどはHysiaiの敗戦を契機として、メッセニアが反乱を起した、と推定している。この第二次メッセニア戦争の時期を決定する一つの手がかりはテュルタイオスの詩(fr. 5)にある *ἀρχηται πατέρων ἡμετέρων πατέρες* という言葉で、テオポンポス王から数えて3代目の時代ということは推定でき、それが前7世紀中葉よりも古い可能性の少ない根拠となる。しかし、それ以上に細かい時期を決定することは不可能である。いまひとつ、パウサニアスの記述の中で問題となるのはリアノス(Rhianos)のいうレオテュキデスに関する点である(IV. 15.2)。そもそも、第二次メッセニア戦争の時代の王についての言及はテュルタイオスになく、パウサニアスはさきに引いたテュルタイオスの詩からアナクサンドロス(アギス家)、アナクシダモス(エウリュポン家)両王と推定しているのである。しかも、戦争そのものの記述はメッセニアの英雄アリストメネスの物語を中心とし、スパルタ側の王ないし将軍の名は現われない。しかるに、前3世紀の詩人リアノスは、この戦争の時のスパルタ王はレオテュキデスだ、と述べている。パウサニアスの伝える王名の中でレオテュキデスというのは、テオポンポスから8代目のデマラトスの次に王位についたエウリュポン家の傍系の子孫である(III. 7.8)。一方ヘロドトスは、このレオテュキデスの系譜をたどって、その4代前(テオポンポスから5代目)に同名の人物をおいている(VIII. 131)。ヘロドトスはレオテュキデス2世(パウサニアスにも記されている方)の前の7代はスパルタの王ではなかった、と述べているが、エウリュポン家の傍系として、この家系が存在したことは疑ない⁽⁸⁾。テオポンポスからレオテュキデス1世(パウサニアスに記述のない方)までの間に3名の王があり、またレオテュキデス1世と2世との間にも3名の王がある。テオポンポスの没年は推定の域を出ないが、前7世紀の初頭と思われ、一方レオテュキデス2世の即位は明らかに491 B. C. 前後であるから、レオテュキデス1世の治世はこの両年代の中間で、ほぼ前6世紀末から5世紀初期にわたる時代を中心とする年代である可能性が濃厚である。とするとリアノスが第二次メッセニア戦争の時の王というレオテュキデスは、このレオテュキデス1世ではないか、という疑が生ずるのは当然である。ヘロドトス(VIII. 131)では、一応、王ではなかったとされているが、(一般に *πλὴν τῶν δυν τῶν μετὰ Λεωνυχίδα πρώτων καταλεχθέντων* の部分の冒頭は *πλὴν τῶν ἐπτά* と校訂されている)これも絶対的とはいえない。リアノスのいうレオテュキデスが上述の1世であるならば、第二次メッセニア戦争の時期はLenschauの説に近いことになる。また、プルタルコス⁽⁹⁾の伝えるエバメイノンダスの「230年後にメッセニアを回復した」という言葉(Plutarchos Mor. 194 B)も、第二次戦争が600 B. C. 頃であったことを暗示する、と解釈することもできる。

第二次戦争はパウサニアスによれば685 B. C. になるが、Grundyのいう如く、実際はそれより後らしく思われる⁽¹⁰⁾。しかし他方、リアノスの述べるレオテュキデスがヘロドトスに記述のあるレオテュキデス1世であるか否かを定める決め手はない。また、エバメイノンダスの言葉から割り出される600 B. C. 頃も、その時期が、いわゆる第二次メッセニア戦争の時期であるとは限らない。600 B. C. 頃に、第二次戦争とは別個に、メッセニアで反乱または戦争(おそらくは小規模な)が生じた可能性は十分ある。

筆者としては、メッセニアの反抗(第二次メッセニア戦争)が行なわれる可能性の強いのは、スパルタのHysiaiにおける敗戦の後間もない時期であり、したがってDickins,

Huxley, Wade-Gery, Michell などに賛意を表したい。なお、ストラボン (VIII. 362) はアポドロスを引きながら、第二次メッセニア戦争の時、アルゴス、エリス、ピサ、アルカディアがメッセニアと同盟を結んで援助したが、この時のアルカディア軍を指揮したのはオルコメノスの王アリストクラテスであった、と述べている。この王の孫に当るメリサがコリントスの僭主のペリアンドロスの妻となっている (Paus. II. 28.8)。ペリアンドロスが僭主についていた年代については、諸説があるが、キュプセリダイの僭主政は、ほぼ 560-540 B. C. に終ることでは一致しており、したがって、彼の治世は 600-590 B. C. 前後にはじまったと見られる。さすればアリストクラテスの治世が 650 B. C. 前後を含む可能性は強い。これは Dickins, Huxley, Wade-Gery, Michell らの説を補強するものである。戦争が前7世紀中葉以後ではない、とする見解は、また別の面からも支持されるが、その点には、後に触れる。

第二次メッセニア戦争に際して、国内でその占領地の分配をめぐる争があった、といわれているが、これが事実であるならば、その争は貴族に対する民衆の不満が原因になっているはずである。テュルタイオスの詩の中に、協議は王と長老とによってはじめられ、その後で民衆がそれに応えること、および、それがデルフォイのアポロン神の命であることを示したもの (fr. 3) がある。この詩が戦時中の作であるか否か、にわかに断定することはできないが、いずれにせよ、旧来の秩序を守ることを勧告したものである。とすると、この時代から民衆勢力が飛躍的に増大したとは考えられないが、民衆の力に頼らざるを得ない新しいスタイルの軍隊が用いられはじめていたならば、何らかの政治的譲歩がなされるべきである。民衆の占領地への要求はこのように時に生ずるものである。この時に、若干の土地分配の手直しがあり、それを基礎にすべての市民がある一定量以上の土地を有するようになり、それによって民衆の不満をおさえたのではなかろうか。と共に、彼らは生活上の平等を旨とし、それを強調する意味で共同食事 (Phiditia, Syssitia) という古習を制度化したものである。すべての市民が一定の場所に集って、同じものを食するということが、何よりも生活上での平等という意識を人々にうえつける最良の方法である。ここにおいて homoioi (平等者) という言葉が生れてきたのであろう。この homoioi という観念をうえつけるのに成功したことは、この時期に社会的にある程度の安定が得られたことを示す。

また、考古学の教えるところによると、前7世紀後半に入って以後、スパルタに文化的な繁栄が訪れたのである。同時に、地中海全域にわたっての貿易活動がはじまる。スパルタの陶器が海外へ輸出されはじめたのは、黒絵式の導入の直後である。この時期は、ほぼ 620 B. C. であり、それ以後40年間 Laconia II といわれる様式が続く。この陶器は Olympia, Samos, Delos, Rhodos, Ephesos, Naukratis, Tarentum, キュレナイカの Tokra, エトルリアの Caere などから出土しており、スパルタの陶器の流布状況から、その交易圏の広さを知るのである。Laconia III 様式 (580-550 B. C. 頃) も、さらに幅広く行きわたり、この陶器類の輸出が前6世紀前半のスパルタの経済的繁栄を確証するものである、といわれる。輸出された陶器類は実用品のみではないが、特に壺類は油、葡萄酒、香油その他の輸出品の容器として、海外へ送られたものも多い。一方、スパルタ本土からも、明らかに輸入品である象牙、琥珀などの製品が出土しており、Huxley はアーケイック時代のスパルタが厳格・簡素を旨としたとはいえない、としているが、その点はいささか疑問である。また、Hammond は 600 B. C. 以前の交易の中心地として、コリン

トス、クレタ、ロドスと共にラコニア⁽⁶⁴⁾をあげ、それらの土地には、同時に、もっともすぐれた壺が生産される、と述べている。

このような、いわゆる経済的発展を背景として、重装兵を中心とする新しいスタイルの軍隊が完成されたのではなかろうか。新戦術の採用は、すでに、第二次メッセニア戦争⁽⁶⁵⁾当時にもはじまっていた、と考えられるが、その軍隊を支えるものとしての経済的な背景は必要である。ここで注目しなければならないのは、前7世紀以来、象牙、ブロンズ、金細工の名匠・職人が輩出し、彼らの製品もしばしば輸出されていることである。このことと関連して、当時、青銅器具製作技術が進歩したと思われる。そして、それは、他の金属製品と共に、より精巧な武具をより容易に製作し得るようになったことを暗示し、いわゆる新しいスタイルの軍隊と戦術（重装兵ファランクス）を完成するのに寄与していると考えられる。

また、スパルタには、他国から多くの詩人や音楽家が移り住んでいる。詩人としては、前7世紀前半ないし中葉のテュルタイオス、同世紀後半のアルクマン（Alkman）が特に有名であるが、Huxley はこの両者の詩を比較し、その様式の相違、主題の相違が前7世紀中葉の危機⁽⁶⁶⁾からスパルタが完全に立ち直ったことを示す、と推定している⁽⁶⁷⁾。前6世紀にもステシコロス（Stesikhoros）、テオグニス（Theognis）もスパルタに住んでいたようである。音楽家としては、前7世紀後半にテルパンドロス（Terpandros）がある。なお、プルタルコスによると、スパルタでは、詩と音楽との教育が重要視されていた、という（Lyk. 21）が、それは、この両者がともに軍隊の志気を鼓舞するのに役立ったためであろう。もし、このプルタルコスの記述が真実であるならば、詩人や音楽家の移住者が多かったことがその下地を作ったことになるかもしれない。

以上に述べた文化的・経済的発展のために、スパルタの前7世紀後半から前6世紀初頭にかけての時代は、全般的に見れば、繁栄と平和の時代であり、大きな戦争があったとは考えられないのである。同時にこの時期にこそ、いわゆるリュクルゴス体制が、徐々に確立されていったのではなかろうか。経済的な繁栄が、homoioi を中心とする新しいスタイルの軍隊の完成を助勢したであろうことは先に述べたが、このような軍隊、すなわち、何よりも統一のとれた団体行動を必要とする軍隊を維持するためには、次代をになう者にも団体生活を強制し、統一的な行動をとり得る体制を作り上げておく必要がある。したがって、homoioi を維持するために、若者の訓練（Agoge）が不可欠であったのである。その意味で Agoge と Phiditia は表裏をなすものといえることができ、それゆえに新しいスタイルの軍隊の完成⁽⁶⁸⁾がリュクルゴス体制の完成を意味する。

III

前章において、前7世紀後半におけるスパルタの発展を見たが、前6世紀に入ると、また戦争が生じている。何故この時期に戦争が起ったのであろうか。Huxley は 600 B. C. 頃メッセニアの反乱が決定的におさえられたので、スパルタ人の関心がアルカディアの方に向ったのだと述べている。筆者は、第二次メッセニア戦争は前7世紀中葉である蓋然性が高い、と考えているが、スパルタはそれまで、しばしばアルゴスと対戦⁽⁶⁹⁾しており、メッセニアの征服が完成されれば、アルゴスとの抗争があつて然るべきである。それはかつての Hysiai の敗戦に対する雪辱という意味をも持つのである。しかし、それよりもメッセニアに対する支配が確実となると共に、フェイドンによって確立されたペロポネソスにお

けるアルゴスの覇権を奪うことが考えられたであろう。そして同時にアルカディアを征服することが覇権を握るかぎであり、報復という意味をも含み、アルカディアの征圧を第一に考えたことが予想される。

スパルタが攻撃をはじめたのはアルカディア南東部のテゲアであった。しかし、このテゲア攻略は容易には達成されなかった。ヘロドトス (I. 65-67) によると、レオンとヘゲシクレスがスパルタの王であった時代には、遂に、これを征圧することができなかった。ただ、ヘロドトスの伝える神託 (後述) が下されたのはレオンとヘゲシラオスの時代であるのかどうか、はっきりしないが、神託を求めたのはリュクルゴス以後で、しかも、あまり多くの年のへだたりはなかった時期の如くに読みとれる。ヘロドトスはリュクルゴスがレオポテスの摂政となった、ということスパルタで聞いている (I. 65) が、前6世紀の中頃に生れた詩人シモニデスは、リュクルゴスがアギス家ではなく、エウリュポン家の出身であることを認めている (Plut. Lyk. 1) から、当時すでに二つの見方があったようである。パウサニアスによると、エウリュポン家のカリロスの時に、はじめてスパルタ人たちはテゲアを攻撃したが、その時、スパルタの侵入軍は敗れ、カリロス自身多くのスパルタ人と共に捕えられ (Paus. VIII. 48.4-5)、彼らは足枷をつけられたが、その足枷が Athena Alea の神殿に残っていた (VIII. 47.2) という。ヘロドトスの記事によると、アルカディアを攻略せんとして、デルフォイの神託を求めたところ、アルカディアは与えないが、テゲアを得させる、との託宣が得られたので、足枷を持ってテゲアに軍を進めたが、戦に敗れ、捕えられたものは持参した足枷をみずからの足につけられた。その足枷はヘロドトスの時代にも Athena Alea の神殿に保存されている (I. 67) という。ヘロドトスはこのテゲア攻撃の失敗が何時の時代のことか明示していないが、パウサニアスの伝えるカリロスによるテゲア攻撃失敗と同じものである、と思われる。このカリロスは、伝承では、テオポンポスの二代前で、幼時はその叔父に当るリュクルゴスに補佐されていた。

以上の攻撃失敗を伝える物語は、ヘロドトスにしても、パウサニアスにしても、テゲア攻撃 (とその失敗) がリュクルゴスの時代から間もなくであることを示唆している。⁽⁴⁵⁾ 要するに、これは、テゲア攻撃の積極化したのが、リュクルゴス体制の確立後であることを暗示しているのである。この体制は、前章で見た如く、600 B. C. 頃に、ようやく確立されたようである。そのように考えると、アルカディア攻略に関する神託が求められたのは600 B. C. 以後であり、レオンとヘゲシクレスとの治世の初期 (前6世紀初頭) である可能性が強い。しかるに、パウサニアスによると、ヘゲシクレスの⁽⁴⁶⁾ 治世は、その前王のアルキダモスの治世と共に、平和であった (III. 7.6)、⁽⁴⁷⁾ という。これはテゲアとの敵対関係が、いまだ本格化していなかったことを示すものであると同時に、テゲア攻略が、特にアギス家の諸王によって熱心に行なわれたことを暗示している。スパルタはアナクサンドリデスとアリストンとの治世にいたって、テゲアを征服し得た。これは、おそらく、スパルタの重装兵ファランクス⁽⁴⁸⁾の成功した最初の例であろう。アナクサンドリデスとアリストンの治世は、ヘロドトスの記事 (I. 65) から、リュディアのクロイソスと同時代であることが知られる。クロイソスの治世は、ほぼ 560-546 B. C. であるが、彼がスパルタと同盟を結ぶために使者を送った時は、すでにスパルタはテゲアの征服に成功していた。しかも、クロイソスがスパルタとの同盟を考えたのはメディアのアステュアゲスがキュロスに敗れた (ca. 550 B. C.) 以後⁽⁴⁹⁾ と思われる。したがって、スパルタのテゲア征服は 550 B. C. 以

前であることが推定されるのである。これと、ほぼ同時代の出来事として、キロン (Chilon) なる人物のエフォロス就任があげられる。キロンはヘロドトス (I. 59) によると、アテナイの僭主ペイシストラトスの父ヒポクラテスと同時代人であり、ディオゲネス・ラエルティウス (Diogenes Laertius I. 68-73) によると、52オリンピアードに、すでに老年に達しており、56オリンピアード (556-553 B. C.) の紀年のエフォロス (ephoros eponymos) であった、という。彼がこの官職を強化したことは、特にエフォロスがアナクサンドリデスに一種の重婚を強要したというヘロドトス (V. 39) の伝えから十分考えられるところである。かつて筆者は、エフォロスが最初、王による任命制であったのが、後に民選となり、その時期は第二次メッセニア戦争後に存在したと思われる改革期で、Phiditia などの制度化と共に、民衆への支配階級の譲歩の一環なりと推論したが、エフォロスという法の管理者と考えられる官が民選になったその意義は重大である。エフォロスの民選は、彼らが文字通り市民の代表者となったことを意味するが、エフォロスはそのため、市民の力を背景として、政治的発言権を強めることができるようになった。キロンが、もしエフォロスの地位を強化したならば、やはり、そこには民衆の力の増大が予想されるのである。その契機となったものこそ、テゲアの征服である、と考えられる。さきに述べた通り、600 B. C. 頃までには、経済的繁栄を背景に、homoioi たるスパルタ市民がすべて重装兵となり得るようになってきているから、戦勝に対する民衆の比重は非常に大きくなっている。この民衆の増大した力が王と貴族とによって構成され、民会に対して予備的審議機関としての役割をはたす長老会に、民意をいささか反映させるため、エフォロスを恒常的に参加せしめ、民会の召集権をエフォロスに移譲せしめたもの、と思われるのである。少なくとも、この時代にエフォロスの政治上の権限が飛躍的に増大したのであり、キロンの名が後にまで伝えられているのは、彼が紀年のエフォロスであった年 (556 B. C.?) が改革の年であったことを意味するのではなかったか、と考えられるのである。

さて、スパルタがアルカディアを自己の勢力下におくにあたって、攻撃目標をテゲアに限ったのは何故か。それは、いうまでもなく、デルフォイの託宣によるのであるが、テゲアの占める地理的条件を合わせ考えるべきである。すなわちこの地はスパルタからアルゴス、コリントスへ向う主要な路に沿ったところに位置し、アルゴス、コリントス両国を牽制するために、したがってまた、ペロポネソスにスパルタの覇権を確立するために、是非とも、この地を勢力下におく必要があったのである。

ヘロドトスとパウサニアスは共に、テゲア征服と関連して、オレステス (Orestes) の遺骨をスパルタへ移したことを伝えている。ヘロドトス (I. 67-8) によると、どうしたらスパルタ人がテゲアを征服できるか、をデルフォイの神にたずねた時、神託は、アガメムノンの子オレステスの遺骨をスパルタにもたらすように命じた。それにもとづいて、アガトヘルゴスの一人リカス (Lichas) がこの遺骨をさがしあて、これを持ち帰り、それ以後は、常にスパルタ側が勝利をおさめるようになった、という。オレステスは伝説上、ヘラクレイダイの帰還以前のミュケナイとスパルタの王であり、ペロプスの子孫である。ペロプスはペロポネソスを征服し、これを支配したといわれている。また、パウサニアスによると、オレステスはアカイア人の王であり (VIII. 5.1)、ミュケナイのほかアルゴス、スパルタの王位を継ぎ、アルカディアの大部分を領有し (II. 18.5)、その墓はテゲアの近くにあった (VIII. 54.4)、という。

しかし、テゲアを攻略する場合には、テゲアを守る英雄の遺骨が問題となるはずであ

る。しかもパウサニアスはその都市建設者たるテゲアテスの墓がテゲアにあった、と
している (VIII. 48.6)。しかるに、テゲア攻略に際して、テゲアテスではなく、オレステ
スの遺骨が問題になるのはなぜか。ヘロドトスが伝えるリカスの発見した遺骨は、実
は、誰のものでもよいのであって、問題は彼自身はその場所と状況をデルフォイの神託に
沿うように解釈して、それをオレステスの骨と信じ、また、他の人々にもそれを信じこ
ませたのは何故か、ということである。その場合、骨を持ち去られたテゲアが地理的
には、アルカディア地方の一部であることがきわめて重大である。伝説の上では、ヘ
ラクレイダイの帰還の際、アルカディア王キュプセロスはヘラクレイダイの一人クレ
スフォンテスに娘を与えることによって、その王位を維持し、アルカディアを危険か
ら救った (Paus. VIII. 5.6) とい、アルカディア人の国土のみはヘラクレイダイに犯
されなかったことになっている。ところで、この伝説は言語学上の研究の結果と合致
する。すなわち、前12世紀にはじまる西ギリシア民族 (西方言群) の南下はそれま
でのギリシアの諸族の居住地の上に、大きな変化をもたらした。ペロポネソス半島
に居住していた東ギリシア民族 (東方言群) は新来のドリス人など西ギリシア民族
(西方言群) によって征服されたが、一部はエーゲ海を経て小アジアに移住した。こ
のドリス人のペロポネソス侵入が伝説の上ではヘラクレイダイの帰還という形であら
われる。しかし半島中央部のアルカディアの方言のみは西ギリシア民族のものと著
しく異なり、この地方のみは新来の民族の侵入を受けなかったことが知られる。そ
の上、このアルカディア方言がはるか東のキュプロス島の方言と非常に類似点が多
いこと、最近解読されたミュケナイ文字で書かれたギリシア語 (西ギリシア民族侵入
以前のギリシア語) がアルカディア方言と同じ系統の特徴を示すことから、アルカ
ディア人こそ西ギリシア民族侵入以前の東ギリシア民族の後裔で、かつては彼らがペ
ロポネソス半島全体に分布していた (いわゆるミュケナイ人) ことが証明されるので
ある。⁶⁰⁾

したがって、アルカディアのみは古い伝統を維持しており、その地にヘラクレイ
ダイ帰還以前の英雄であるオレステスの遺骨と信じられるものの存在することは当
然でもあったが、スパルタ人にとっては、きわめて不都合であった。すなわち、そ
の遺骨の存在によって、アルカディアがその子孫たるの正統性を主張する可能性
が残され、ヘラクレイダイと信ずるスパルタ人のペロポネソス半島における覇権
の主張に対する障害となる。しかも、当時は、そのような英雄の埋められている土
地は、その英雄によって守られているという信仰があるが、同時に、その英雄の遺
骨は、国外で死んだ場合はその故地に移される例が見られる。オレステスは、伝
承上、メネラオスの女婿で、スパルタ王の正統の後継者であり、その遺骨がス
パルタに移される理由は存したのである。この遺骨のスパルタへの移葬によっ
て、オレステスはスパルタを守る英雄と見なされ、それはスパルタとテゲアとの
両国民に、何らかの心理的な影響を及ぼしたはずである。そして、オレステス
の骨がドリス人の国家であるスパルタに移った、という宣伝は、アルカディアの
人々にとっても、西ギリシア民族に服した東ギリシア民族の後裔にとっても、大
きなショックであったに違いない。しかし、それだけではない。スパルタがテゲ
アを征服するに当って、テゲアテスの骨ではなく、オレステスの骨を求めたのは
、ほかならず、彼らの目標がテゲアのみにあるのではなく、全アルカディアへの
覇権の拡張にあったためである。

一方、オレステスの骨の移動はスパルタのペロポネソス南部・西部に対する覇
権を背景としている面もある。いわば、ヘゲモニーの聖化ともいべきものであり
、テセウスの骨とアテナイのエーゲ海圏に対する覇権との関係と揆を一にする面
がある。それが同時に、⁶¹⁾

スパルタを中心とする一種の同盟関係の成立を意味するのである。その同盟を維持するためにその遺骨の存在が大きな役割をはたし、スパルタ人がかつてのオレステスの後継者であると思わしめること、したがって、ペロポネソスの覇者となるのが当然であることをペロポネソスの人々に納得させる根拠ともなった。かくして、彼らがオレステスの子孫であること、すなわち、アカイア人であることを外に対して宣伝しはじめると、オレステスの子ティサメノスの墓もスパルタになければならない。そこで、これもまた Helike から移されたのである (Paus. VII. 1.8)。しかし、オレステス (およびティサメノス) の骨の意義は、更に別の点にもあった。オレステスは、本来、ミュケナイ、アルゴスの王であったが、既述の如く、姻戚関係からスパルタの王位を兼ねた。しかるに、その遺骨がスパルタに移されたことは、争った場合、アルゴスはスパルタに敗れることを暗示している。ドリス人の侵入以来、アルゴスとスパルタの間の対立は古くからあったが、Hysiai の戦の後にはアルゴスが優位に立った。このペロポネソスにおけるアルゴスの覇権を奪うことがスパルタの最終目標であった、と思われる。その場合、オレステスの骨がスパルタに移されたことの意味はきわめて大きい、といわねばならない。それは暗黙のうちに、スパルタの覇権をアルゴスに認めさせることを示している。特に、オレステス、ティサメノスは共にアルゴスとスパルタを支配しているから、そのオレステスの後継者をもって任じるスパルタが、当然、アルゴスをも支配下におかねばならぬこととなる。このような意味で、オレステスの遺骨の宣伝の裏には、対アルゴス政策を読み取ることができるのである。

IV

以上見たところからいい得ることは、スパルタによるテゲア攻略の成功が、スパルタ史上、きわめて大きな意義を持っていた、ということである。内政に関しては、これをきっかけとして、一般民衆の勢力増大と政治的発言権の要求がおこり、これがエフォロスの権限の大幅な拡大という結果をもたらした。このエフォロスは、一方においては民衆の代弁者となりながら、他方では長老 (貴族) と結んで王権を制限する方向に進んだ。すでに前5世紀には、スパルタ王の保有している権限は軍事関係、宗教関係のものに限られ (Hdt. VI. 56-7)、政治上の権限はいうに及ばず、裁判権も、一部を除いて、その手中にはなかった。王とエフォロスとの毎月の誓の交換 (Xen. Lak. Pol. XV. 7) も、同じく王を牽制する手段であり、その起源はこの前6世紀中葉にあるのではないかと推察されるのである。

また、軍事面では、いうまでもなく、重装兵ファランクスの戦法の成功によって、自信を得たことがうかがわれる。と同時に、リュクルゴス体制の効果が、ようやく現われはじめた、と見ることができる。

他方、対外的には、これをきっかけにアカイア人の故地であるペロポネソス半島の支配者として、オレステスの後継者であることを主張した。しかし、より重要なことは、スパルタがペロポネソス半島の覇権を獲得することにより、海から陸へと、より多くの関心を寄せざるを得なくなったことである。先に見た如く、600 B. C. を中心として、スパルタの商品は、かなり広範囲に行きわたっていたが、550 B. C. 頃からの25年間に、大部分の取引先をアテナイに取られた、といわれている。この時期は、ちょうど、アテナイでアマシスの画家やエクセキアスが活躍した時代であるが、輸出も盛に行なわれはじめている。スパルタ陶器の輸出が、はたしてスパルタの船によって行なわれた否かは、にわかには断定

できないが、以上の事実はスパルタがペロポネソス半島の内部に、より大きな関心を持ったためである、と見ることができる。いいかえれば、自発的に、海外に対する門戸を閉ざしはじめたのである。特に、陶器において Laconia IV (550-525 B. C.) が衰えて以後、壺はもっぱら国内での使用に供するためにのみ作られた。

以上のように、オレステスの骨の獲得とテゲア征服とがスパルタの内政面にも外交面にも、大きな変化をひきおこさせたのである。そして、リュクルゴス体制の確立と、この時期の内政・外交両面にわたる変革を経て後、スパルタはその完成された姿をとって、あらわれるのである。内政面での特色である権力の強い特殊な監督官エフォロスの存在、外交面での特色であるいわゆる鎖国主義は、まさに、この時期の変革の結果、生じたものにほかならない。その変革の契機となったものこそ、テゲアの軍事的征服であったことを考える時、この事件の意義の大きさを程を知るのである。また、古典期に他のポリスから特異なもの、と見られていたポリス・スパルタの諸特質は前6世紀の中葉になって、ようやく成立したことをも認めなければならない。

註

- (1) Arist. Pol. II. 12. 1274a-b にさまざまな立法者の例がある。
- (2) 拙稿「スパルタの Great Rhetra に関する二三の問題」(『西洋古典学研究』XII, 1964, pp. 27-39.)。
- (3) 前掲拙稿 pp. 28-34 参照。
- (4) ドリス人の伝統的な三部族を地縁的な五部族に再編成すること。
- (5) この点については、できる限り近い機会に報告する予定である。
- (6) これと共に槍の用法もかわり、飛道具としては用いられなくなった (A. Andrewes, *The Greek Tyrants*, 1956, p. 31)。
- (7) V. Ehrenberg, *Der Staat der Griechen*, 2. Aufl., 1965, S. 98.
- (8) 大牟田章「ギリシアの軍事組織」(『古代史講座』第5巻, 1962, pp. 199-227.) pp. 201-3 参照。
- (9) H. Bengtson, *Griechische Geschichte von den Anfängen bis in die römische Kaiserzeit*, 2. Aufl., 1962, S. 107.
- (10) H. L. Lorimer, *The Hopliton Phalanx with special reference to the poems of Archilochos and Tyrtaios*. (BSA. XLII, 1947, pp. 76-138)
- (11) ギリシアでは、装備は自弁であるから、いまだ全市民が、ただちに重装兵になり得たのではない。しかるに、前8世紀の中葉より多くの植民市が建設され、本土と植民市との間の交易が盛となると、必然的に、本土に商工業が発達した。これにともない、武具を製造する手工業も発展して、武具をより安価に入手できるようになった。このことは重装兵ファランクスという戦術上の変化を可能ならしめた要因の一つである。
- (12) Bengtson, op. cit., S. 81; N. G. L. Hammond, *History of Greece to 322 B. C.*, 1959, p. 141. Pheidon の時期の異説については J. G. Frazer, *Pausanias's Description of Greece*, vol. 4, p. 96; W. den Boer, *Laconian Studies*, 1954, pp. 55-64 など参照。
- (13) Andrewes, op. cit., p. 41.
- (14) スパルタから多数出土した鉛製の小形戦士像は、すべて円楕をもっている。これらは前7—6世紀のものとされている。
- (15) K. M. T. Chrimes, *Ancient Sparta*, 1949, p. 398.
- (16) T. Lenschau, *Die Entstehung des spartanischen Staates*. (Klio 30, 1937, SS. 269-89)
- (17) 以下若干の例をあげれば、前7世紀中葉より、やや前とするのは G. Dickins, *Growth of Spartan Policy*. (JHS. XXXII, 1912, pp. 1-42) p. 22. [669 B. C. より間もなく]。G. L. Huxley, *Early Sparta*, 1962, p. 59. [669-657 B. C.] H. T. Wade-Gery, *The 'Rhianos-Hypothesis'*. ("Ancient Society and Institutions". Studies presented to Victor Ehrenberg on his 75th birthday, 1966, pp. 289-303) pp. 296-9. [660-650 B. C.] H. Michell, *Sparta*, 1952, p. 16. [650 B. C. より後ではない]。
前7世紀の中頃 (650 B. C. 頃) とするのは U. Wilcken, *Griechische Geschichte im Rahmen der Altertumsgeschichte*, 8. Aufl., 1958, S. 113. den Boer, op. cit., pp. 133-4.

- 同世紀後半とするのは G. de Sanctis, *Storia dei Greci*, vol.1, 6 edizioni, 1961, p.570. E.N. Tigerstedt, *The Legend of Sparta in Classical Antiquity*. (Stockholm Studies in History of Literature 9) 1965, p.63. Hammond, op. cit., p.136. [640 B.C. 頃にはじまる]。A.R. Burn, *The Lyric Age of Greece*, 1960, p.182. [630 B.C. 頃か]。Ehrenberg, op. cit., S.294. [前7世紀末]。F. Kiechle, *Lakonien und Sparta*, 1963, S.245. [前7世紀末]。
- (18) Hdt. VI.65 参照。
- (19) Wade-Gery, op. cit., p.296 も、ごく大まかにいって、レオテュキデス1世はテオポンポス(700 B.C.)からレオテュキデス2世(500 B.C.)の間であるとして600 B.C. 頃をその治世と考えている。
- (20) G.B. Grundy, *Thucydides and the History of his Age*. Vol.2, 1948, p.215.
- (21) Huxley, op. cit., pp.59-60; Wade-Gery, op. cit., pp.295-9 など参照。
- (22) K.J. Beloch, *Griechische Geschichte*, I.2, 1913, SS.274-84; F. Schachermeyr, *Periandros*. (RE. XIX, 1937, col. 711-4), 清永昭次「ペリアンドロスの奴隷取得禁止令」(『歴史学研究』294, 1964, pp.1-13) p.1.
- (23) Arist. Pol. V.12.1315b によると、ペリアンドロスは44年(または40年半)の間僭主であった。
- (24) Arist. Pol. V.7.1306b によると、人々が土地の再分配を求めたことがテュルタイオスの詩「エウノミア」から知られる。
- (25) この詩全体の解釈については、問題となる点もあるが、ここに記したことについては、ほとんど異論はない。
- (26) Chrimes, op. cit., pp.305-6; Michell, op. cit., pp.11-6; Huxley, op. cit., pp.61-5.
- (27) R.M. Cook, *Greek Painted Pottery*, 1965, p.94.
- (28) Cook, op. cit., p.94.
- (29) ラコニアの陶器にコリントスの影響のあることは E.A. Lane, *Lakonian Vase-Painting*. (BSA, XXXIV, 1933-34, pp.99-189) がしばしば言及し, Cook, op. cit., pp.96-9 もふれている。コリントスの黒絵式が550 B.C. 頃, 突然, 衰滅すると, ラコニアの黒絵式も衰退しはじめる。
- (30) Cook, op. cit., p.98.
- (31) Huxley, op. cit., p.64.
- (32) Hammond, op. cit., p.131.
- (33) Huxley, op. cit., p.63.
- (34) Hammond, op. cit., p.131.
- (35) 新しい戦術の採用は, さきに引いた Lorimer によって, 前7世紀の前半と思われる。(Tigerstedt, op. cit., p.49 など参照)。
- (36) Huxley, op. cit., pp.63-5.
- (37) 第二次メッセニア戦争。
- (38) Huxley, op. cit., pp.61-2.
- (39) Huxley, op. cit., p.64.
- (40) いわゆる 5 lochoi の編成はこれに伴なう軍隊の新編成であろう。
- (41) Huxley, op. cit., p.65.
- (42) パウサニ阿斯によると, アギス家の所伝ではレオボテス, アルカメネスの治世 (III.2.3; 2.7), エウリュポソン家ではプリュタニス, カリロス, ニカンドロス, テオポンポスの治世 (III.7.2-5), にアルゴスとの対戦を伝えている。
- (43) 前章のアリストクラテスに関する記事参照。
- (44) エウリュポソン家の伝承ではリュクルゴスはカリロス(ヘロドトスはカリラオスと記す)の後見者としてあらわれる (Plut. Lyk.3)。
- (45) ヘロドトスはリュクルゴスの改革ののち, 間もなくスパルタはテゲアを攻撃したと思われる書きぶりをしていいる。(Hdt. I. 66)。パウサニ阿斯は, リュクルゴスがアギス家のアゲシラオスの時代に改革を行なった, と述べていいるが, アゲシラオスの子アルケラオスはカリロスの僚王である (III.2.4-5)。なお, プルタルコス(プタルコス)はエウリュポソン家のエウノモスの子としてリュクルゴスをあげ, しかもそれが当時の通説であった, といっている (Lyk. I)。リュクルゴスの異母兄で王位にあったポリュデクテスの子がカリロスである。したがってカリロスの治世はリュクルゴスの改革の直後となる。
- (46) Paus. III.7.6 にはアゲシクレスと記されているが, 明らかに同一人である。
- (47) Hdt. I.68 の記事参照。
- (48) Hdt. I.46 参照。

- (49) 拙稿「スパルタのエポロイ」(『西洋史学』LVII, 1963, pp.1-18) p.14.
- (50) M. Cary, *Geographical Background of Greek and Roman History*, 1949. pp.87 & 91.
- (51) 高津春繁『ギリシア文法』1960, p.3.
- (52) W.W.How & J.Wells, *Commentary on Herodotus*, vol. I, 1928, p.90.
- (53) Huxley, *op. cit.*, p.69 はその一つの証拠として前6—5世紀のスパルタ王クレオメネス(アギス家)がみずからドリス人ではなくアカイア人である, と述べたという Hdt. V.72 の記事をあげているが, これは必ずしもその証拠とはならない。少なくとも, ギリシア人の考では, 「ドリス人がヘラクレイダイと共にペロポネソスを占領した」(Thuk. I.12) のであり, その場合, 後の王家は, 当然ヘラクレイダイに属するのである。クレオメネスがアカイア人と自称したのは, アカイア人の英雄ヘラクレスの子孫(ヘラクレイダイ)という信念からと思われる。しかし, このヘロドトスの記事は, 当時のギリシア人が, すでにスパルタ人をすべてドリス人と見なしていたことを示しており, そのためこそ, 宣伝が必要だったのである。
- (54) 546 B.C. にスパルタはアルゴス領のテュレアを攻め, これを奪い取っている(Hdt.I.82)。
- (55) Tigerstedt, *op. cit.*, p.66-7 が550 B.C. 頃を境として, スパルタの外交方針は攻撃的なものから防衛的なものになった, といっているが, 対ペロポネソス内に関してはその通りである。これはペロポネソスに覇権を確立したために起った変化である。
- (56) Huxley, *op. cit.*, p.73. Huxley はスパルタの海外貿易からの後退の原因のひとつを海軍が設置され, 貿易港が軍港となったため, と推定しているが, それには従いがたい。海軍の設置と貿易とは利害の相反するものではなく, 互に相補なう関係にある。
- (57) Cook, *op. cit.*, pp.82-3.
- (58) Cook, *op. cit.*, p.99.